



TITLE:

シェーカーズの衰亡

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. シェーカーズの衰亡. 経済論叢 1965, 96(6): 377-395

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/133096>

RIGHT:

經濟論叢

第九十六卷 第六號

シェーカーズの衰亡 ……………穂 積 文 雄 1

ベルヌーイの効用指標 ……………鎌 倉 昇 20

「資金配分問題」と数理計画法 ……………浅 沼 萬 里 39

書 評

イギリス革命論における反対者たち ……………堀 江 英 一 63

經濟論叢 第九十五卷・第九十六卷総目録

昭和四十年十二月

京都大學經濟學會

シェーカーズの衰亡

穂 積 文 雄

シェーカーズの日常生活は、まことに整然としている。整然として、一絲みだれぬ概がある。それは、われわれの、さきにみたところのごとくである¹⁾。もっとも同時代のひとびとの中には、シェーカーのひとびとに反感をいだいたものも、すくなくない。シェーカーのひとびとに対して悪声がはなれたことも、めづらしくはない。それは事実である。しかしながら、おもうに、それらは、羨望・嫉視によるものであろう。そういつてよいのではなからうか。そうでないとは、いえないのではなからうか。わたくしには、どうも、そうおもわれる。どうも、そうでないとは断言しにくいようにおもわれる。その証拠には、後代のひとびとは、たいてい、シェーカーのひとびとの生活を嘆称する。わるくいうものは、ほとんどない。おもうに、それは、かれらにとっては、シェーカーのひとびとは、もはや、過去のひとびとである。かれらのコンテポラリズではない。コンテポラリズでないものは、利害関係がない。利害関係がないところに羨望・嫉視の生ずる余地はない。あっても、それは、きわめて、ちいさい。それだからである。そうかんがえて、よいのではあるまいか。そして、そうかんがえてよいならば、そのことは、シェーカーのひとびとの日常生活が整然としていたということを、うらがきすることになる。そういうことになる。そういつてもよいであらう。いわんや、シェーカーのひとびとは、百年の余にわたって、その繁栄をほしいままにしている。百年余といえ、みじかい年月ではない。それは、ながい年月である。もし、シェーカーのひとびとの日常生活が整然としたものでなければ、かれらは、どうして、そのように長い年月にわたって、繁栄をほしいままにすることができたであらうか。こうみてくると、われわれは、シェーカーのひとびとの日常生活が整然としていたということは、

1) シェーカーズの日常生活、本誌、95巻4号。

これをみとめなければならない。われわれは、それを、いなむことはできない。すくなくとも、わたしには、そのようにおもわれる。

しかしながら、シェーカーは、もと、一つの宗教団体である。だから、それは一の組織をかたちづくる。その組織は、その教義にもとづく。そして、その日常生活は、その教義の実践・具現にはかならない。そのことは、われわれのすでに、あきらかにしたところのごとくである²⁾。しかるに、その教義は、独身・共産・隠遁を特質としてもつ。したがって、その日常生活は、それらの特質の実践・具現でなければならないはずである。そして、かれらの日常生活は、事実、それらの特質の実践・具現である。そして、いかに、それが、そうあるかは、また、われわれの、かれらの日常生活をうかがうことによって、すでに、あきらかにしたところのごとくである。しかるに、これらの特質は、いづれも、もと、人性にもとる。すくなくとも、人性にしたがう所以ではない。そうかんがえられる。人性にもとること・人性にしたがう所以でないものは自然ではない。自然でないものを実践・具現することは、むづかしいことである。たやすいことではない。したがって、そこには、むりが生ずる。すくなくとも、生じやすい。そして、そのことは、シェーカーのひとびとの日常生活における難点であることを、おもわしめずにはおかない。われわれは、そのことを、みおとすわけにはゆかない。したがって、シェーカーのひとびとの日常生活が、いかに、整然としているとしても、それは、表面のことである。一步内にいって、その裏面をのぞけば、そこに、われわれは、破綻・矛盾の因子をみないという保証はみいだしがたいことになるであろう。したがって、以下、わたくしは、しばらく、それについて、いささか、うかがうところ、あるであろう。

まづ共産についてうかがってみよう。

おもうに、共産は人性にもとる、といわれる。もっとも、人類原始の状態は共産であった、だから、共産こそ、人類の自然のすがたである。そういう言を、

2) シェーカーズ、10. 本誌、93巻6号。

しばしば、きく。それは事実である。たしかに、そのとおりであったであろう。アダムが耕し、イヴが織ったとき、たれが、一体紳士であったか。そう、いわれれば、われわれは、その言に、耳をかたむけざるを得ないことにもなるであろう。だが、しかし、人類は、みな、共産時代を脱して私有の時代に入った。それも、また、事実である。蔽たる事実である。事実であることにはかわりはない。したがって、人類は共有時代より私有時代にすすむものであることをいなむわけには行かないであろう。それなら、それが、人性ということになるのではなからうか。かくて、共産は人性にもとるという言はちからをもつ。そして、かず多くの共産のころろみが、いづれも失敗したる事実は、そのちからをます。そのことをみとめぬわけにはゆかないであろう。しかしながら、シェーカーのひとびとにおいては、そのような事情はあまりみられないようである。共産が人性にもとるということは、シェーカーのひとびとに関するかぎり、それほど、あらわれては、いないようである。それでは、それはなにゆえであろうか。

それについて、ひとは、すぐ、かんがえることであろう。シェーカーは宗教団体である、かれらには宗教上の情熱・信仰の力がある、それこそが、共産を可能ならしめる、と。だからであろう。アメリカに簇生した無数の共産体の中、比較的ながつづきしたものは、ほとんどといってよいくらい、宗教団体のそれであったことが指摘される。たしかに、それは、そのとおりであろう。わたくしは、かならずしも、それをいなむものではない。けだし、共産は、もと、人性にもとるところがある。人性にもとるところがあるものは、そのかぎり、自然でない。自然でないものをおここのうところには無理が生ずる。無理をおすにはなんらかの力がある。もちろん、そのちからは、一つには、かぎらない。いろいろのものがあろう。それは、みとめなければならぬであろう。ひとは、よく、かかる力として、理性のそれ、あるいは知力をあげる。たとえば、いわゆるユートピアン・ソーシャリストとよばれるひとびとの場合がそうである。ロバート・オーエン、フーリエ等々、比々、みなしかり、である。これらのひとびとは、それに倚存するとかんがえられる。しかしながら、理性は、かなら

ずしも、感情と一致するとはかぎらない。知と情は、いつも、合一するとはかぎらない。その場合、ひとは、情におぼれ、情にながされることなしとしない、いな、情にながされることの方がむしろ、普通のようにさえみえる。かくて、知と行はかならずしも一致しない。だからこそ、よく知行合一が説かれるわけである。でなければ、わざわざ、知行合一が説かれねばならないということはあるまい。そう、かんがえられる。かくて、感情にながされがちのひとを、ひきとめて、理性の命ずるところにしたがわしめるには、さらに他の力が必要となる。かくして、権力がその存在理由をもつことになる。権力による強制が必要となる。共産陣營の国家において、権力による強制が顕著にみられるのは、この事情による。そう、いっても、かならずしも、はなはだしい、いいすぎには、ならないであろう。しかしながら、ころざしをおなじくするものが、あいよって構成する共産体においては、もと、強権の発動をこのまないはずであろう。それどころではない。そのような強権の発動を忌避するところこそ、そのような共産体の建設運動のよって生ずる原因の重要な一つがあるのが普通である。だから、そこには、強権の発動があまり、みられなかった。かくて、簇生したそれらの共産体はうまれるとみるまに、たおれていった。そうかんがえても、よいであろう。その中にあって、ひとり、宗教団体のそれのみが、比較的ながつづきしたのは宗教団体のそれらには、宗教上の情熱・信仰という力があつたからである。そういうことができるであろう。まことに、それは偉大なる力である。この力の発動するところ、ひとびとは、その生命をも投げ出す。水火をも辞せぬ。いわんや区々たる財物をや。そういうことになる。これ、シェーカーのひとびとにおいて、共産について、こまったという事情をみることに、あまり、なかった理由である。かれらの間において、共産について、不平のつぶやきをきくことが、あまりなかった所以である。そう、いって、よいでもあろうか。

それは、そういって、よいであろう。たしかに、そういってよいであろう。しかしながら、それでは、その理由は、それだけであろうか。そうとわれると、

わたしは、こたえたい。そればかりではないと。なぜか。わたくしは、まづ、つぎのような事情も、この場合、かんがえに入れてよいのではなかろうか、とおもう。それだからである。事情というのは、ほかでもない。こうである。わたくしは、かつて、アルファデルフィア・アッソシエーションについて、一文を草したことがある⁷⁾。その中で、わたくしは、つぎのごとき引用をこころみたものである。

かれらが、ひとしくなめてきた艱難辛苦は老いた開拓者たちの間にほんとうの兄弟^{ブザー}関係を確立していた。かれらの財産は、共有でこそなかったが、ひとびとに羨望の念をいだかしめることもなく、また、ひとびとの間に差別のあつかいを生ぜしめることもなかった。栽培はもとより、開墾においても、とうもろこしのかわむきのあつまりにおいても、たがいに、たすけあい、そうして、また、あらゆる労苦をとうりぬけ、あらゆる困難にうちかかってきた。かれらの援助・乃至・親切が、すこしでも、やくだつところでは、どこでも、それは、こころよく、あたえられた。かれらは、まづしさは、おなじでなかったが、富める階級はなかった。べつに、これといった、あらそいや競争も、なかった。かれらは、おなじコミュニティーのなかで、ともにくらし、一家族のように団樂し、幸福にひたっていた。だから、シェッタリイ博士が現在アルファデルフィアとよばれる家族的な勤労のアッソシエーションを創立するために、この地にきたとき、かれが、そこに、みいだした移住者^{セトラーズ}たちは、みなとまではゆかなくとも、大部分は、アルファデルフィアのひととして、ことをともにすることのできるひとたちであった。

これとおなじような事情が、シェーカーのひとびとにもみられたこととかがえてよいであろう。そうかんがえることは、かならずしも、むりなことでは、ないであろう。それはゆるされるところであろう。そして、それがゆるされるところであるならば、シェーカーのひとびとにおいて共産について、こまったという事情をみるのが、あまり、なく、また、共産について、不平のつぶやきをきくことが、あまり、なかった、としても、われわれはそれをあやしむにはおよばないであろう。

つぎに、われわれは、さらに、いま一つの事情をおもわねばならない。その

3) アルファデルフィア・アッソシエーション、本誌、90巻4号。

事情というのは、こうである。

おもうに、'およそ、労働は、分業・協力において能率が増大する。このことは、アダム・スミスの分業論以来、あまりにも周知の事実'に属する。いま、シェーカーのひとびとは、共同生活をいとなむ。だから、かれらは、分業・協業の利を発揮することができる。そして、それは、事実、発揮された。いかに、よく、それが発揮されたかは、われわれは、すでにうかがったかれらの日常生活の中に、これを見ることができはすである。したがって、そこにおける生産力は、大であるはずである。すくなくとも、かれらが、この共同生活にはいなかった場合に比すれば、はるかに、大であるはずである。したがって、また、周辺の水準からは、かけはなれて、大であるはずである。そうかんがえてよい。いな事実、そうであった。わたくしは、そのことを証明するために、ここに、一つの事例を示そう、それは、かれらが、周辺の住民の反目を買った、ということである。シェーカーのひとびとが周囲のひとびとの嫉視・羨望のまとなったことについては、さきにも、ふれておいた。ところで、それでは、その羨望・嫉視・反目はなにから生ずるか？。それは、シェーカーのひとびとの生活が、かれらのそれよりもゆたかであり・ゆとりがあることから生じる。そのことは、たやすく、みうるところであろう。そして、そのゆたかさ・ゆとりは、かれらの生産力が大であることからうまれてきたものにほかならない。それは、いうまでもないところであろう。わたくしが、この一聯の論稿において、よく、ひきあいに出す、「ビリーバーズ」の中にも、かれらが周辺の農民から、嫉視・羨望をうけ、ついに、かれらのために、じまんの製粉所 (mill) がやきうちにあう事件がとりあつかわれているが、それを見ると、この間の事情が、いっそう、あきらかとなるようにおもわれる。だから、ここにそれを引いてみよう。こうである。

わたくしたちは、一日のしごとをおえて、火をかこんですわっておりました。リチャードはつかれていました。かれはながぐつをぬいでいました。とりいれは、あらかた、すんでいました。しかしながら、かれは、その間中、ずっと、はげしく、はたら

いていました。はたらきづめでありました。なやは、みな (the barns)、みちあふれていました。ひとびとは、豊作で、すっかり、上気嫌でありました。わたくしはぬいものをしていました。それは、おだやかな晩でした。それで、わたくしたちは、ほんの、ちいさい火に、あたっていたのです。へやは、その火と、わたくしたちのもっていた一本のローソク (candle) がもえていて、そのひかりとで、ぼんやりと、てらされてきました。ちょうどそのころあいでした。わたくしたち二人は、二人ながら、へやの中のひかりが非常につよくなったことに、気がつきました。リチャードはあたりをみまわしました。「どうして、ここが、このように、あかるくなったのだろう」。わたくしは、すぐ、ひかりがそとがわからきていることをしりました。わたくしは、まどのあるところに、かけよりました。「大納屋よ、リチャード！ 火事よ！」。

かれは、うわぎを、ひつつかみました。しかし、ながぐつは、わすれて、くつしたばきのままで、家の外にとび出しました。わたくしは、ショールをひっかけて、かれのあとをおいました。そとでは、大きな火焰が天に押ししていました。そして、パチパチいう火焰の音が、わたくしたちのいるところまで、きこえてきました。それはブラザー・ランキンのあるところになっている一番大切ななやでした。一番あたらしく、また一番大きなものでした。わたくしたちは、そこにむかって、かけてゆきました。他のひとびとも、わたくしたちに、くわりました。そして、わたくしたちは、すでに火事場にかけてついていたひとびとのさげびを、きくことができました。

リチャードが、あまりに・はやく・かけるので、わたくしには、かれに・おいつくことが、できませんでした。あのひとは、いつでも、うさぎのスピードではしるものが、できます。しかし、わたくしは、パーミラとトーマスには、おいつきました。トーマスは、いきをきらして、あえいでいきました。「もう、どうしようもないでしょう」と、かれは、あえぎながら、いいました、「火があんなにまわってしまっは。」

かれは、のろのろとしていました。パーミラとわたくしとは、かれを、かけぬけました。わたくしたちは、むらがっているひとびとはしに、出ました。火を消そうとして・とび出して・はたらいっているひとびとは、まっくろにこげているようにみえました。そして、そのひとたちは、けむりにむせてせきをし、目をしばたいて目から永をながし出しました。わたくしたちの立っているところでさえ、火焰の強烈な熱は、わたくしたちの顔を焼きはじめました。ブラザー・ランキンはそばに立って、なきながら、両手をかたくにぎりしめていました。ブラザー・ベンジャミンは、かれのかたわらに、立っていました。ブラザー・ベンジャミンは、昂奮してはいましたが、混乱の中に秩序をもちこむことにつとめていました。ついに、かれは、両手をあげて、ラッパにしました (he raised his hands and made a trumpet of them)。「みなさん。

もう、だめです。もうておくれです。ほおっておきましょう。もえるにまかしましよう。けが人を出したくはありません」 ("It's no use, men. It's too far gone. Let it go. Let it burn. I don't want anyone to hurt").

実際、ほおっておくしか、しかたがありませんでした。クリークの中の水をすっかりさえましても、火を消すにはたりませんでした。また、その水を汲みあげて・はこぶ人数も不足していました。ひとびとが、ベンジャミンのこゝばをきき、そしてそれがつたえられますと、みんな熱と煙から退避して群集の中にかえってきました。ブラザー・ベンジャミンはがっくりとしました (Brother Benjamin's shoulders slumped)。 「これは、悪魔のしわざだよ。ジョン」と、かれはブラザー・ランキンにもうしました。 「俗界のたれかが、この火つけをしたのだ (Someone of the world set this blaze)。かれらは一番大きなや・一番多く穀類が貯蔵されておるなや・われわれにとってその喪失からくる損害の一番大きいなやをえらんだ。」

火焰のひかりの中で、わたくしは、かれがおもてをあげ、うでをあげるのをみました。そして、かれがこういふのをききました。 「おお、神よ。マザー・アンとおなじに、あなたのしもべは迫害をこうむっております。かれらをおゆるしてください。なんとなれば、かれらは、かれらのなすところのものをしらないのですから。そして、あなたのしもべであるわれわれに、それにたえるマザー・アンの力をあたえたまえ」。

これは、わたくしどもにとって、最初の迫害の経験でありました。

レベッカは、 「これは、わたくしどもにとって、最初の迫害の経験でありました」という。そのとおりである。かの女らにとって、迫害は、ただこの一度ではなかった。しばしば、おこなわれている。

かく、迫害はしばしばおこなわれた。ということは、それだけ、その嫉視・羨望は大であったということである。そして、そのことは、それだけ、シェーカーのひとびとのゆたかさ・ゆとりは大であった、と、いうことである。そして、そのことは、やがて、シェーカーのひとびとの生産力が、いかに、大であったかを、ものがたる。生産力が大となり、生活がゆたかとなり、ゆとりができれば、こまることはないわけである。そういってもよいはずであろう。

かくして、われわれは、シェーカーのひとびとの社会において、共産について、こまったという事情を、あまり、みることなく、共産についてあまり不平

をきくことがない、ということになるわけである。しかし、そうは、いうものの、それらのことが、全然ないというわけではない。私有財産の人心に根をばっていることは、きわめて大なるものがあるであろう。そう簡単にとりのぞくことができるものではないであろう。はやいのはしだが、レベッカの場合である。いままでも、しばしばわたくしの論断に対する証人として登場してもらったことのあるこの女性は、この場合にも、また、よい例証を提供してくれる。だから、ここにそれをうかがってみよう。それは、実に、つぎのごとくである。

……、わたくしは、いま、ビリッジの中で、おそろしく不幸ではありません。ほんのわづかの間にすぎませんのに、すでに、わたくしは、ビリッジの生活に、なれてしまっていました。ですが、わたくしの内に、わたくし自身の場所がどこかにあることを知る必要が、依然としてあったことも、事実でございました (But it was true that within me there was still the need to know there was some place of my own)。わたくしは、いつかは、そこへ、たちかえるであろうということを、意識してかんがえたことはありません。また、それを希望さえしたことはありませんでした。ですが、いま、なお、わたくしの名義とリチャードの名義になっている土地のことをかんがえますとき、いつも、きまって、わたくしは、こころにやすらぎをおぼえました。わたくしには、それから、わたくしをひきはなすことは、とうてい、できませんでした⁵⁾。

それにも、かかわらずシェーカーのひとびとの間にあっては、共産についてあまり不平をきかぬ。そのことは、依然として、かわりはない。そういってよい。すくなくとも、わたくしには、そうおもわれる。そこで、わたくしは、さらに、何が、シェーカーのひとびとをして、そうあらしめるかについて、追及をつづけてみる。すると、ここで、われわれは、シェーカーのひとびとにおける独身制のことを想起しないわけにはゆかないことになる。というのは、こうだからである。「財産は盗奪である」(La propriété, c'est le vol)⁶⁾ とブルードン (Joseph Pierre Proudhon) はいった。それは、あまりにも周知のとこ

5) *Ibid.*, pp. 282-284.

6) *Ibid.*, p. 184.

7) Pierre Joseph Proudhon, *Qu'est que la propriété ?*, p. 1.

るに属する。しかしこのブルードンでさえ、その場合、財産というのは、実は、不労所得を意味するにすぎない。ひとがみづからの労働によって生産したものはその人に帰属することは、これをみとめなければならない。そう、かれは、いつている。そして、その理由は、そうしなければ、子孫に相続させることができない。それでは生産意欲がなくなる。そういうのである⁸⁾。これによって、これをみると、子孫に相続させるということが、私有財産の存立において、いかに大なる意義をもつかが、あきらかとなるであろう。まことに、そのことは、私有財産における重大なる要因の一つである。それだけにそのことは、共有制えの一つの重大なる障害でなければならない。そういうことになるであろう。ところがシェーカーのひとびとの間においては、独身制が厳守・励行せられる。それは、すでに、みたところのごとくである。しかるに、独身制の下においては、もと、子孫が存しないはずであろう。そうすれば、子孫に相続させるということは、そこでは、なりたちようがないはずでなければならないであろう。すなわち、そこには、私有財産の存立における重大な要因の一つが存在しないということになる。そこには、共産制に対する重大な障害の一つが存在しないということになる。それなら、そのかぎり、シェーカーのひとびとの間にあっては、私有財産えの執着があまりないということにならねばならない。そのかぎり、かれらの間において、共産制について、こまった事情が、あまり、みられず、かれらの間において、共産について、不平のつぶやきが、あまりきかれない、と、いうことにもならねばならないであろう。それに、ふしぎはない、と、いうことにならねばならないであろう。そういうことになるはずであろう。

かくて、われわれは、シェーカーのひとびとの共産制における独身制の意義の大なることをしる。ところが、この独身制が、それ自身、また、一つの大きな問題である。けだし、それは、また、人性にもとり、自然にそむくものとかがえられること、きわめて大なるものがあるものであるからである。そこで、

8) *Ibid.*

われわれはつぎにそれについて、うかがうところがあるであろう。

シェーカーの教義の特徴の一は、その独身制である。そのことは、周知のところに属する。そして、そのことは、また、われわれの、すでに、あきらかにしたところに属する⁹⁾。そして、シェーカーのひとびとの日常生活が、いかに、この教義の実践としてなりたっているかは、これ、また、われわれの、さきに見たところのごとくである。かれらの日常生活が、いかに、この教義の実践のためにしくまれているかは、われわれの、さきにうかがったところのごとくである¹⁰⁾。まことに、そこには、そのために、微に入り細をうがつ考慮がはらわれておる。それは、まことに、ひとをして感嘆これを久うせしむるにたるものがある。そのことは、なにびとといえども、これをいなむを得ないところである。そういってもさしつかえはない。そういってもよいであろう。しかしながら、陰陽和合・異性相引・男女相愛は、もと、これ、自然の大法則である。この自然の大法則に反するがごときは、そもそも、むりというべきものである。しかるに、独身制は、まさに、この自然の法則に反するものである。したがって、独身制の厳守・勵行というがごときことは、もともと無理でなければならない。もとより、世間はひろい。だから、ひとは多い。ひが多ければ中にはかわりだねも出る。それにふしぎはない。かくて、よく、終身独身をおしとおすひとだって、ないとはいえない。げんに、おしとおしたひともある。しかし、その場合でも、それは、結婚をしなかったということをいみするのである。異性との肉体的交渉がなかったということをいみするものでは、かならずしも、あるまい。そこまでいみするとすれば、そういうひとは例外に属する。そういっても、よいのではあるまいか。そういうと、それなら、シェーカーのひとびとは、その例外に属するのだとかたづければ、それですむではないか。そういうひとがあるかもしれない。そういえば、それは、そのとおりでもあろう。しか

9) 2) をみよ。

10) 1) をみよ。

しながら、それにしても、そこには、異常な克己力を必要とするものがある。いくらシェーカーのひとびとといえども、みながみな、そういう異常な克己力をもちあわせているとも、かんがえられまい。すると、どういうことになるであろうか。いうまでもなく、そこには、すなわち、シェーカーのひとびとの間には、くらかげがさすことをまねがれないことになるであろう。いくら、表面、独身制が整然として、一絲みだれぬみごとな偉容を誇示していても、一步内にたちいって、その裡面をうかがえば、そこに、明朗をかくものが、みられねばならないことにもなるであろう。もとより、かくのごときは、隠微に属するところである。それは、いうまでもないところであろう。だから、これをうかがうことは容易でない。ことは、きわめて至難である。そこで、「ビリーバーズ」の中のレベッカが、それについてしるすところは、きわめて、貴重なものでなければならぬ。わたくしは、だから、しばらく、それによって、這般の消息をうかがうところあるであろう。

レベッカの夫のリチャードが、シェーカーに帰依して、まだ、ファミリー・ハウスにはいない間のことである。リチャードは、すでに道心かたく、レベッカをよせつけない。ここにおいて、レベッカは、こう嘆ずることになる。

わたくしたちのホームは、しばらくの間、わたくしにとっては、一の奇妙なところになりました。リチャードは、あいていたべやにうつりました。かれは、それが一番よい、ともしました。そして、わたくしもそのことを、していました。わたくしは、かれの意にさからって、二度とかれを誘惑すまい、と決心していましたのです。わたくしは、かれにふれることさえ、しないようにいたしました。かれを誘惑して道心の邪魔をすると、かれにおもわれることを、おそれたからです。でも、わたくしの両手が、隋性で、かれをもとめてのび、かれの顔や肩の触感をおもい出しながら、にぎりしめられたことは、たびたびでした。かれの衣服をあつかったり・あらったり・それにアイロンをかけたりするだけのことでさえ、わたくしにとっては、おもいでの苦悶 (a torture of remembrance) となりました。そして、ひとめのない場合には、ただ、かれのからだのふれたなんらかのもの・かれのからだにもっともちかくふれたものにさわる、というだけのために、かれのシャツにわたくしの顔をうづめたことも、

しばしばでした。

それは困難なことでした。それは、リチャードにだって、やはり困難なことでした。と、もうしますのは、長年の習慣を放擲するということは、不自然なことだからです。一度ならず、わたくしはみました。かれの方からわたくしの方に手をのばしてくるのを。……一度ならず、わたくしはみました。かれが、ものほしげに、わたくしをながめて、……をのぞむのを。しかし、かれは、いつも、おのれにうちかち、急に、身をひるがえして、家の外・わたくしの視界の外に立ち去りました。

あのひろいベッドのひとりねに、あわれ、きづつける心をいだいて、なきのなみだに、まくらをうるおしましたことも、そも、いく夜でありましたことか (Many were the nights, in that wide and lonely bed, heavy, hearted and miserable, I wept until the pillow was wet)。そして、リチャードが、夕食後、ブラザー・ランキンのところへ出かけ、わたくしがねてしまった後に、かえろうとおもって、おそくまでいたこと、そも、いく夜。わたくしは、ねむっていませんでした。わたくしは、いつも、かれがかえってくるのをききました。わたくしは、いつも、かれがそわそわするのをききました。わたくしは、いつも、かれの決意がもっと薄弱で、ついに、また、わたくしのベッドの中にはいつてくることをのぞみました。しかし、それは月を手に入れるよりもむづかしいことでした (But I might as well have wished for moon)。かれは、がんばりました……そして、すこしずつ、苦痛でなくなりました。

ほかのひとたちも、それぞれ、ごたぶんにもれていないことが、まもなく、わかりました¹¹⁾。

ついで、かれらはシェーカーのビルッジに入る。そこでは、さきにみたごとき、日常生活がいとなまれる。そこでは、それに対して、レベッカは、こういわないではいられなかった。

それは、わたくしには、ばかげたことにおもわれます。……「一体、なぜ、男女をいっしょにしておくのでしょうか。なぜ、二つのドア・二つの階段・二つの入口をつくるかわりに、男には男のビルッジ、女には女のビルッジをつくらないのでしょうか?。」

……

「かれらは、このんで、^{トワブル}艱難を要求しているのですよ。リチャード。これらの別々のドア、これらの別々の階段、それから、これらの別々の入口は、ひとびとが、その

11) J. H. Giles, *ibid.*, pp. 102-103.

自然の衝動のままに行動するのをとめようとはいたしません(...are'n't going to keep folks from doing what comes natural to them)。それらのものは、ブラザー・ランキンや、ブラザー・ベンジャミンや、また、あなたのようなひとびとにとっては、その必要さえないものでしょう。ですが、ほんとに誘惑を感じるひとにとっては、それらのものは大きな力をもった・あわれな障害物 (a mighty bar) です。まったくのところ、それらのものは、ただ、誘惑を増すだけのものでしょう。それらのおとこのひとびとの中のとれかは、じぶんたちの階段をのぼりはじめるとき、いつも、他方 (女——訳者) の階段をのぼるということのおもいに、とりつかれまいとします、それでいて、おそらく、どうして、こっそりとぬけ出して、他方の階段をのぼろうかというおもいに、とりつかれていることでしょう (There 'll never be a time some of those men commence climbing their own stairs but what they won't be put in mind of climbing the other, and may be put in mind of how to slip and do it)。また、それらの女のひとびとの中のとれかは、その別々にせられたドアを通過するとき、かの女たちは、いつも、その指頭に、男のひとが他のドアを通過するということを、はっきりと知るでありましょう (And every time some of those women go through that separate door, they 'll know clean to their fingertips what man's going through the other one)。中には、うまく時間が合うようにもくろむものもありましょう (Some will plot to time it just right)。ああ、猫を殺す方法は、バタの上でくびりころすだけとはかぎりませんわ。そのほかにも、いろいろの方法がありますわ。リチャード。そして、それらの方法をみつけ出すひとたちは、いますことよ。……そして、かれらに隔離せられていることをおもいださせるものは、なにものでも、みな、ただ、かれらをけしかけるだけでしょう¹²⁾。

かく、レベッカは、シェーカーにおける独身制のゆえに、なき、シェーカーの独身制を、かつ、いかり、かつ、うらむ。しかしながら、シェーカーの独身制のゆえに、なき、シェーカーの独身制を、かつ、いかり、かつ、うらむものは、ただ、ひとり、レベッカだけにかぎったことではない。そのことは、シェーカーのビリッジ内の女性の室におけるつぎの会話をきけば、おもいなかばにすぎることがあるであろう。

12) *Ibid.*, pp. 105-106.

アンニイの眼に、また、涙がにじみ出ました。「ねえ」と、わたくしは、もうしました。「それをにくむのは精力の浪費というものだわ。あなたは、ここに、いるわ。そして、ロバートがいるかぎり、あなたは、ここにいてでしょう。それになれっことになるようにするのが、あなたのためだわ。わたくしには、そう、おもわれるわ。」

「もし、わたしのおもいどうりにするんだったら」と、かの女は、熱っぽい調子で、もうしました。「わたくしたち二人は、あなたがおかんがえになるよりも、ずっとはやく、ここを出て行くことになるのよ。」

「おお」と、パーミラがもうしました。「それ、あなたの手 (game) なのね。ロバートを説き伏せて、出て行くようにしようとするのね。かれに、乾草の中にくろがしてもらい、そうして、かれの慾情をもえあがらせ、かれがここに不満を覚えて出て行くことになればよい、と、おもっているのね。そんな魂胆で、妊娠し (get in the family way)、そこで、かれがあなたをつれ去らねばならないようにするというのね。それはあなたにはできない相談とは、わたくし、おもわなくてよ。」

「わたくし、そうできたら、そうしたいわ！ わたくしちいさいロバートをちちばなれさせたいとおもうのよ。そうすれば、わたくしの健康も回復するでしょうし、是非そうしたい！」「おお、わたくし、あなたをせめる気はすこしもないわ。」と、パーミラは、わらいながら、もうしました。「もし、ロバートがわたくしのものだったら、わたくしも、きっと、おなじことをするでしょうよ。ですが、あなた、あの本館 (Center House) にいるブリッシイとか、シスター・スザンとか、シスター・モーリーを納得させるのが大仕事だわね。と、いっても、罪をおかしては、いないのだからねえ。」

「そんなこと、するつもりないわ。」

「それはわかるわ。」

「あなた、しゃべることはしないでしょね」と、アンニイは、真剣に、たづねました。「それはわれわれがしなければならぬことよ。あなた、わたくしどものみんなに、おしゃべりをしてしまったのですもの。」

「もう、やめにするわ。もう、二度と、はなさないわ。」

「あなた、それ、ちかう？」

アンニイは、かの女の右の手をあげました。「わたくし、ちかいます。二度と、もうしません。」⁽¹³⁾……

かくて、独身制は、人性にもとる。不自然である。無理である。したがって、シェーカーのひとびとにおけるその厳守・勵行は、かれらの日常生活を陰鬱にする。かれらの社会に暗影を投ずる。そういえることになる。しかしながら、そういうと、ひとはいうでもあろう。それを克服するところにこそ、宗教の宗教である所以があるのではないかと。そういわれれば、そのとおりであろう。まさに、そのとおりであろう。わたくしは、それを、いなもうとは、おもわない。現に、ともかく、独身制は、そこでは、まもられてきた。すくなくとも、大きな破綻を生じては居ない。それは、みとめなければならない。わたくしといえども、それをみとめるにやぶさかなものではない。しかしながら、独身制の欠陥は、ただ右にあげたものにはかぎらない。それが、その全部ではない。すくなくとも、いま一つの欠陥がある。しかも致命的な欠陥がある。それをみおとしてはならない。それは、ほかでもない。子供ができないということである。子供ができないということは、やがて、子供がないということ意味することにならねばならない。子供がないということは、共産制にとってはプラスである。そのことは、すでに、みたところのごとくである。しかし、子供がないということは、後継者を欠くということでもある。そして後継者を欠くということは、かれらの社会が、早晚、絶滅するということの意味せねばならない。そして、こればかりは、いかに宗教の偉力をもってしても、いかんともすることができない。そうすると、シェーカーの、その教義の実践・具現は、シェーカーの絶滅をもたらすこと以外のなにものでもないということにならねばならない。これほど大きい欠陥は、ないはずである。わたくしが、それを致命的の欠陥という所以である。まさに、文字どおり、それは致命的の欠陥である。さすがに、レベッカは、シェーカーのこのいたいところをついていう。「結婚や分娩を否定しておいてかれらは、いかにしてその存続をはかるといえるのか？やがて、ソサイエティーは自滅するでしょう」(How..., if there's not to be any marrying or bearing young, do they intend to keep going? In time Society 'll die out of itself)¹⁴⁾。シェーカーは、この点については、外部よ

14) *Ibid.*, p. 107.

り子供をうけいれることをかんがえた。これに対しても、レベッカは痛烈きまる批判をこころみている。いわく、「それでは、純潔なるが故に子供をうまぬシェーカーのひとびとは、汚濁した俗界にすがって、子供を供給してもらおうとするのね」(So Shakers, too pure to bear young, are going to depend the sinful world to provide young ones for them!)¹⁵⁾。まったく、シェーカーのいたいところをついている。これには、シェーカーのひとびとの中のだれだって、かえすことばに窮するほかなかったことと、おもわれる。しかし、背に腹はかえられぬからであろう。シェーカーは、それを実行している。しかしながら、かくのごとくしてうけいれた子供が成人の後シェーカーの信仰に燃えることは、保証のかぎりではない。シェーカー・ピリッジにおける上述の矛盾を蔵する日常生活にたえうることは、保証のかぎりではない。はたして、かれらの中からスキャンダルをひきおこすものが出たのは¹⁶⁾、あやしむにも、あたらないところである。そこで、次第に、その政策は放棄せられるにいたった。そして、うけいれは、両親ぐるみということになった。しかし、入信する両親は、あまりなかった。それどころか逆に離団するものさえみられるにいたるぐらいであった¹⁷⁾。

以上、われわれは、シェーカーのひとびとの日常生活の裏面をうかがった。そして、そこに、いくたの不合理・欠陥・矛盾が伏在するをみた。シェーカー・ピリッジにおけるこれらの不合理・欠陥・矛盾は人体における病菌にあたる。病菌がつよくなれば人体を害し、ついに、その生命をうばう。同様に、これらの不合理・欠陥・矛盾の進行・拡大はシェーカー・ピリッジの衰亡を来す。そうかんがえられる。そして、そうかんがえれば、以上、われわれが、うかがったところは、やがて、シェーカーの衰亡の因をさぐったことにほかならない。

15) *Ibid.*

16) For example, *ibid.*, pp. 226-228.

17) For example, *ibid.*, p. 234.

しかしながら、シェーカーは、それにもかかわらず、その後、100年以上存続した。1870年代ノルド・ホフ氏は、したしく、各地のシェーカー・ビレッジを歴訪した。そして、その繁栄の状を報じている¹⁸⁾。それでは、シェーカーは、どうして、そう長きにわたって、繁栄をつづけることができたのであろうか。それに対するこたえは、究極的には宗教の以外には、これをみいだすことはできないであろう。そのことは、これまでの長い論述の中から、読者は容易にのみとることができるであろう。まことに、そのパッションは大である。まことに、その信仰はつよい。しかし、そういうひとはいふかるであろう。それでは、なぜ、シェーカーは、ついに、衰亡したのであるか、と。しかしながら、この不審に対して、こたえることほどやさしいことはあるまい。なんとなれば、それは、宗教心が冷却したからである、と、こたえれば、すむであろうから。そういえば究極においては、そのとおりである。それにちがいはない。そういつてよいであろう。しかしながら、そういつて、かたずけて、しまうには、その衰亡は、あまりに、いろいろの事情を包蔵している。だから、われわれは、さらに、たちいつて、それらの事情をうかがわねばならない。しかしながら、いまや、わたくしにのこされた紙数は、まさに、つきんとしている。だから、だから、いまは、ただ、つぎの諸点の指摘にとどめるをもって満足するのほかはない。

かれらの生産力の相対的低下。かれらの生産力は、分業・協業の利により、一般水準より高かった。それはすでに、うかがったところのごとくである。かくて、個人企業に対する共同企業の優位を享受した。しかるに、資本主義の発展・進行の結果、資本の集積・集中を見るにおよんで、かれらは、大企業に対する中小企業の劣勢を甘受することを余儀なくせられた自己をみいださねばならないことになった。

かれらは後継者にめぐまれなかった。それは、すでに、みたところのごとくである。当然、かれらのビレッジの人口は高齢者化し、かつ、減少するをまね

18) Charles Nordhoff, *The Communistic Societies of the United States*, New York, 1875.

がれなかった。かくて、かれらは、その広大なる土地・施設の利用ができなくなった。もはや、むかしのごとく自給自足というわけには行かなくなった。そこで、それらの土地・施設はこれを俗界のものに貸与することになった。かくて、かれらはレントナーであるじぶんじしんをみいだすことになる。人口の減少とそれに応ずるレントの増加は、収入の増大をもたらす。しかし、シェーカー・ビルリッジは、もはや、その実を失うことになる。かくて、ついに、漸をおって、ビルリッジが閉鎖される。あるものは、去って俗界に入る。あるものは、レバノンの本山に収容される¹⁹⁾。かくのごとくして、衰亡の行進曲、葬送の曲が奏される。そのレバノンの本山も、いまは、ダッロー・スクール (Darrow School) と化している。そのことは、すでにふれたところのごとくである。しかし、いま、これを、このスクールの概要より摘記して、この稿をおわることにしてしよう。いわく。

ニュー・レバノンのチャーチ・ファミリー、シェーカー・シスター・エンマ・ニール (Sister Emma Neale of the New Lebanon Church Family Shaker) は、シェーカーのひとびとの「消えて行く」(going out)——かの女は、そう表現した——のをみ、シェーカー・ビルリッジの将来について、思案をめぐらした。かの女は、それについて、かの女のよき友、いま一人のシェーカー・チャーチャーのシスター・アメリア・カルバー (Sister Ameria Calver, another Shaker teacher) と、はなしあった。そして、一つの少年たちのための学校こそ、シェーカーの施設を有効に利用し、シェーカーのなんらかの伝統を保存するに最適であるとの結論に到達した。1929年、かの女たちはヘイト氏 (Mr. Haight) と会談し、学校創立のことを引受けることを説得した。かれは、シスター・エンマの^{アイディア}理念を実行するに、まさに、好適の人であった。……かれは、その特性の情熱をもって、ただちに、活動をはじめ、シェーカーに関心をいだくひとびとのグループを結成した。

……1929年・1930年の困難な不況時代に、基金がつのられた。そして、40棟の建物と300エーカーの土地が、シェーカーのひとびとより購入された。1932年9月、……レバノン・スクール (the Lebanon School) が開校された²⁰⁾。

19) Everett Webber, *Escape to Utopia, The Communal Movement in America*, New York, 1959, pp. 71-72.

20) *The Story of Darrow School*.